

久万高原町の米作りで守られる 愛媛の絶滅危惧種

トノサマガエル



繁殖期のオス



オス



鳴のうを膨らませて鳴くオス



メス



緑色が強いメス

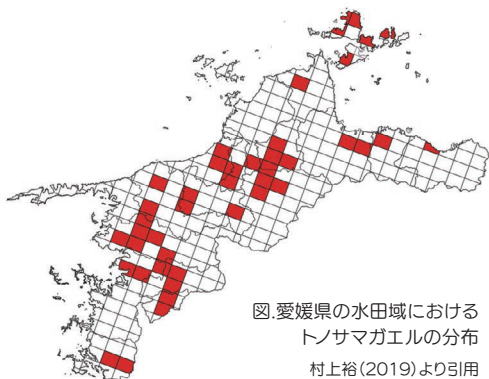


図 愛媛県の水田域における
トノサマガエルの分布
村上裕(2019)より引用



ホトノサマ

トノサマガエルのすむ
久万高原町の水田環境を
PRするオリジナル
キャラクターです

久万高原町では80年以上前から早期栽培による米作りが行われてきました。早期栽培は5月上旬に田植えを行ない、8月下旬～9月上旬に収穫する栽培方法です。これまでに品種の変遷はありましたが、栽培期間に大きな変化はありません。現在栽培されている主なお米は、良食味米として有名な早生品種「コシヒカリ」です。



5月初旬に田植えが行なわれた久万高原の水田

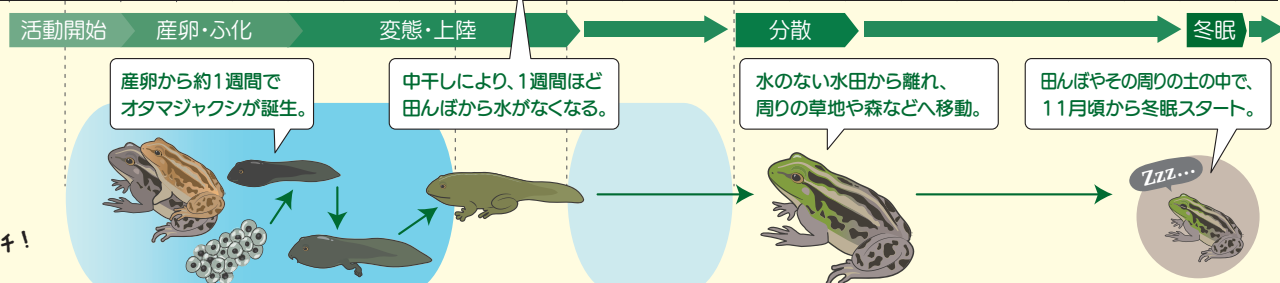
トノサマガエルを 久万高原町の早期栽培が守る



米作りとトノサマガエルのくらしを重ねてみよう！

栽培型	4月			5月			6月			7月			8月			9月			10月			11月
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬
普通期栽培 (松山市などの平野部)					耕起	代かき		田植え			中干し							収穫				
短期栽培 (松山市などの平野部)					耕起	代かき		田植え			中干し							収穫				
早期栽培 (久万高原町の米作り)				耕起	代かき	田植え			中干し									収穫				

久万高原町での
トノサマガエルの
くらし



松山市などの平野部では、6月中旬に田植えを行い、9月下旬から収穫する「ヒノヒカリ」などを用いた普通期栽培や、より収穫時期が早い「あきたこまち」を用いた短期栽培が普及しています。

これらの方法では、栽培期間が久万高原町と比べてとても短く、それに合わせ、田んぼに水がたまっている期間も短くなっています。

久万高原町の早期栽培では田植え後40～45日ほど、田んぼから水を抜く「中干し」を7～10日程度行ないます。これは根の成長を促したり、イネが成長しすぎるのを止めるためです。代かきの始まる4月中旬

からこの中干しまでの約2ヶ月は水が豊富にあります。トノサマガエルは産卵後1週間でふ化し、オタマジャクシは約1ヶ月半で足が生え、尻尾がなくなって子ガエルへと変態します。その頃まで早期栽培の田んぼには水がたまっているため、子ガエルまで成長することができます。一方、6月中旬頃に田植えを行なう普通期栽培や短期栽培では、水がたまっている期間が短すぎるため、子ガエルに変態することができません。



トノサマガエルを 久万高原町の水田管理が守る

水のなくなる中干しは、ふ化の遅かったオタマジャクシや変態直後の子ガエルにとっては大きな試練となります。

しかし、久万高原町の田んぼには、中干しの間でも彼らが生き残れる水場やジメジメした湿地が残ります(右の写真①②③)。これらは久万高原町の農家さんたちが代々引き継いできた、山ならではの合理的な水田管理方法です。決してカエルたちがすめるように行っているものではありませんが、結果的に子ガエルが生き残れる場所を作り出しています。当たり前に行っていることが次の年、また次の年に田んぼに集まるカエルたちを繋いでいるのです。



①



波板で田んぼを回り込むような水路(イデ)をつくり、冷たい山水の水温をあげてから田んぼに引き込んでいます。「イデ」には水が残りがやすく、中干しの間や落水後でも様々な生き物が見られます。

②



緩やかな斜面の田んぼは棚田になっています。山地の棚田では段差部分に水がしみ出てくるため、イネを植えない場所「ウライデ」を設けることがあります。ここにも常に水がたまりがちで、生き物たちの生活場所になっています。

③



田んぼの周りにはコンクリートで固められていない土の畔や道が多いため、草地や小さな林が点在します。これらも立派なカエルたちの生息地や隠れ家です。カエルのエサになる小昆虫もたくさん見られます。

トノサマガエルのすみにくい水田



トノサマガエルは指先に吸盤がないため、壁面を登るのが苦手。そのため、コンクリート化された垂直の畔や水路では、うまく這い上がって移動することができません。

松山市内の水田

久万高原町からは
8種のカエルが見つかっています。
田んぼではトノサマガエルを
含めて5種が見られます。
どの種も個体数が多く、
まさにカエル天国！



ホトノサマ



ニホンアマガエル



シュレーゲルアオガエル



ツチガエル



ヤマアカガエル



マドジョウ

体長は最大で20cm近くなる。ヒゲ
の数は10本。水路や田んぼの泥のな
かにすむ。昔は食用にしていた。



オオキベリアオゴミムシ

体長約2cmの甲虫。畔や湿った地面で
見られる。幼虫はカエルを食べないと
成長できない。



クロゲンゴロウ

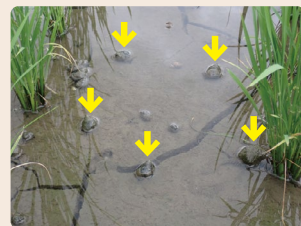
サナギの時期以外を水中で生活するた
め、水路やため池など、一年中水のた
まった環境が必要。



アオダイショウ

カエルの天敵。特に若い個体はカエル
をよく食べる。大きくなると、ネズミや
鳥類を食べる傾向が強くなる。

希少なマルタニシ



山地性の在来種。卵ではなく、小
さな稚貝を産む。愛媛県内の生
息地はかなり少ないが、久万高
原町には多い。過去には食用に
していたという話もあるが、現在
はその存在もあまり知られてい
ない。ピンク色の卵を産むのは
外来種のスクミリンゴガイ(ジャ
ンボタニシ)で、移植直後のイネ
の食害が問題となっている。